

Title	津田道治著 津田真道
Sub Title	
Author	三邊, 清一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1941
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.35, No.3 (1941. 3) ,p.385(123)- 408(146)
JaLC DOI	10.14991/001.19410301-0123
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19410301-0123">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19410301-0123</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

津田道治著「津田眞道」

三邊清一郎

津田道治著「津田眞道」傳が出た。津田眞道は、徳川幕府が派遣したわが國最初の海外留學生の一人、眞一郎である。本書には「弱冠、眞一郎と稱す。津山藩を脱して後、自ら開田又は皆傳太郎、同眞一郎と稱し、又津田行彦と改む。後眞一郎に復し、維新に及びて、今の名に改む」とある(註)。彼は紀元制定の建白者及び法學論の紹介者として既に聞えて居る。しかし彼はまた福澤先生、西周及び神田孝平とともに、明治經濟學史の第一頁を飾る先覺者である。いまま少しこの方面で知られていゝ人である。私は本書の刊行されたを機會に、これによつてその人と經濟學とを紹介して見たいと思ふ。

(註) 津田道治編著「津田眞道」二頁。以下本書の頁數だけを記す。

著者はこの傳記を編むに當つて、森鷗外の「西周傳」に據つて居られるところが多い。この方法は正しい。鷗外がこの書を書いた明治三十年には眞道はなほ存命であり、その校閲を経て居るからである(「鷗外全集」大正十二年版第七卷一二六頁)。彼の生涯で吾々の最も知りたいのは、あの夙い時代に洋學に志した動機と和蘭留學時代の事蹟で

ある。彼は文政十二年六月津山藩の庖宰の家に生れた。青少年時代には兵學及び國學を學んだ。彼の萬葉調の高い歌があり、その書く文章に國文學的のものがあるのはこの故である。その才を惜んで洋學を慫慂したのは兵學の師であつたといふ。「家業御料理人の儀不器用にて御用立不申候に付」といふ譯で江戸遊學を許され、弘化四年出府し箕作阮甫に就いて和蘭學を修めた。後さらに伊東玄朴の塾に入り、また佐久間象山に兵式を學んだ。吉田松蔭等の活躍した時代で、時にはこれと會したこともあるらしい(四一五頁)。安政三年幕府に蕃書調所が開設せられたとき、阮甫の推舉によりその教授手傳並となつた。その際同時に命を受けたものに西周助があり、兩人の交遊はこの日から初まつた(二三一―四頁)。六年西とともに教授方に進んだ。二人が外遊を決意したのはこの頃である。西は「余等二人の、留學生たらんと思ひ起しは、我國と亞米利加合衆國との間に條約定められて、彼國へ御使遣さるゝこととなり、水野筑後守永井玄蕃頭津田近江守の三人、其の御使の仰蒙りし時なりき」と書いてゐる(一五頁)。この時彼等は永井から留學の許可を得たが、しかしこの折にはこの三人が行かないで、新見村垣、小栗の三旗本が使節として出かけた。萬延元年である。福澤先生が木村芥舟の從僕として渡米せられたのはこの時である。文久元年竹内下野守その他の遣歐使節特派の際にも運動を努めたが、隨行人數の關係から志を遂げなかつた。この時にも福澤先生が反譯方として一行に隨はれたことは何人も知る通りである。しかし機會は三度訪れた。その頃幕府にアメリカへ軍艦三隻注文の計畫があり、これとともに技術並びに學術研究のため留學生の派遣が決定され、兩人は學術研究の方に選ばれた。然るにこの計畫も、偶々アメリカに南北戦争が起つたため中止となつた。かうして機會は三たび訪れ三度失はれた。「かくては年ごろの望も絶えや果つべき。又折もありなんとと思ふものから、徒に月日を過して眞白なる頭打振りては、争でかいと遙かなる旅をばなし遂ぐべき」と西が歎いてゐるのも無理はない。(一七

頁)。しかしこの計畫は全く中止となつたのではなくて、そのうち一隻だけ和蘭に注文され、前年留學を命ぜられた人達がその儘同國に派遣されることになつた。すなはち「米國へ可被差遣旨、先般被仰候處、同國政府に差支の儀出來、依而今般改て軍艦製造は、和蘭國へ御詔相成候に付、同國へ被遣」ることになつたのである(一九、四七頁)。一行は海軍側内田恒次郎、榎本釜次郎、澤太郎左衛門、赤松大三郎、田口俊平、蕃書取調所側津田眞一郎及び西周助であつて、文政二年九月十一日長崎を出帆し、慶應四年四月十六日ロツテルダムに到着した。

## 二

著者は「眞道の一生中、日記様のものなしと書いて居る(二二頁)。唯一の例外は、江戸出發以來の航海日誌であるが、これもアフリカ東方アセンション島附近で赤道を越ゆる記事で了つてゐる。和蘭留學時代の原資料としては、澤太郎左衛門「和蘭陀國へ蒸氣軍艦(フレガット)御詔相成右製造中爲御用相越候節日記」(四六一―八五頁)。「有終」第二十六卷第九號所載、澤鑑之丞「我國に於ける最初の海軍留學生」(參照)、西周「五科口訣紀略」その他手記(「鷗外全集」第七卷、「西周傳」二二五頁)とそれから津田西兩人の指導教師であつたフィッセルングの家に傳はる文書がある筈である(「明治文化研究」第五卷第六號所載幸田成友「和蘭に於ける日本最初の留學生」參照、この一文は同博士の「和蘭夜話」昭和六年に收められてゐる。)そのうちフィッセルングが津田、西兩人に與へた覺書寫しが幸田博士によつて吾々に傳へられてゐる。

## 「覺

津田眞一郎西周助兩君ニ業ヲ授ルコトニ就テノ書付

余思ハクハ津田眞一郎西周助君ノ來志ト其所望ニ應スルニハ治國學ノ原始ヲ授クルヲ以テ至當トス此學ニ屬ス



ル學科五。

其一 天然ノ本分 ナツウールレグト

其二 民人ノ本分 フォルケンレグト

其三 邦國ノ法律 スタートレグト

其四 經濟學 スタートホイスホウドキユンデ

其五 經國學 スタチスチーキ

二君ニ此五科ノ要旨ヲ識得セシムル爲ニハ成丈務テ簡易明白ニ説クベシ

此五科學ハ大約二年ニシテ成業ヲ期スベシ

兩君業ニ就ク前ニ先ヅ深ク蘭語ヲ習ヒ能之ヲ解シ又能ク之ヲ言フコトヲ明瞭ニシテ且容易ナルベシ

余此治國ノ學ヲ教フルヲ以テ自任セバ今年第十月或ハ第十一月ヨリ始メナン最初ニハ大學校ノ休日ヲ除ク外毎

週二晝夜ヲ之ニ充ン

然レドモ若余教ヘテ益ナキヲ諭リ或ハ他ニ故アリ之ヲ廢セント欲スル時ハ何月日ニ拘ラズ之ヲ自在ナラン事ヲ

要ス

二君右ノ業ヲ受ル爲ニハ余ガ家ニ來ルベシ

右ノ數件之ヲ是トスヤ或ハ更ニ他ノ是ニ加ヘント欲スル簡條アリヤ余之ヲ聞ン事ヲ欲ス

千八百六十三年第六月十六日

大學士 エス ヒッセリング

右本書ト違フコトナシ

大學士 イ ホフマン

津田眞一郎殿

すなはち津田及び西はロツテルダムに到着した後一行とともにレイデンに來り、前掲「覺書」に見えるホフマン(註)の紹介でレイデン大學のシモン・フィッセリング Simon Vissering に就いて「國際法、財政學、統計學等を學ぶことになつたのである(七五頁)。西周の「五科口訣紀略」には、この「覺書」を受つたのち、「余等荷蘭語學に従事する幾んど三個月、八月下旬に至る。東脩の禮を執り、是より休校日を除く外、毎週二夕、案下に待し筆記口授二閱年、慶應元年乙丑十月を以て五科の業を卒ゆ」とあり(八九頁)、講義の順序と内容とに就いては、フィッセリングの言葉として、「第一論性法、是れ凡百法の根源をなすなり。第二より第三に至る萬國公法並に國法を論ず、是れ性法を推擴し、外は以て萬國の交際を律し、内は以て國家の治理を紀するなり。而して第四論は經濟學なり、是れ富國安民の術にして、其道の如何を論するなり。而して之終るに第五論政表學を以てす、是れ一國の情狀如何を察して其詳密を致すの術なり」と傳へて居る(九〇頁)。フィッセリングは大學では法律、政治、經濟などを教へた。バスターの熱心な支持者で、新聞を編輯してゐた時代にも英國の反穀物條例運動に賛成する論説を書き、大學の就任の時にも「經濟の自由」と題する演説をした(堀經夫「明治經濟學史、昭和十年、二二二—二六頁。高橋誠一郎教授「經濟學史昭和四年二二八頁参照)。またその「實踐的國家經濟學提要」 Handboek van praktische Staatshouskunde 1860-65 の第一卷々頭には、「これ等の原理は決して人の作る所であらぬ、それは物の本質から來るのである。吾々がそれをうち樹てるのではない、吾々はそれを發見するのである」といふJ・B・セイの「經濟學」初版からの言葉が引かれて居り、その自然的秩序への傾向が示されて居る。彼にはこの他に Grondbeginselen der Statistiek, Het

wisselrecht der XIX de eeuw, Herinneringen 等の著作がある。

(註) ホフマン教授は文久二年遣歐使節派遣の際にも参随したことが、當時のロッテルダム新聞紙の記事を翻譯した「海外新聞別集」(文久三年九月印刷)に見えてゐる。——石川幹明「福澤諭吉傳」第二卷三二〇頁。

津田及び西は業を了へるとともに早速歸朝の途についた。「西刺す日出るかたを眺めつゝ早も日本といはぬ日ぞなき」とはその航海中の詠である(二三二頁)。慶應元年十月十四日レイデンを出發し、スエズを経て十二月二十九日横濱に着いた(九六頁)。翌二年一月直ちに兩人は開成所教授手傳に任ぜられ、續いて教授職に列せられた。そして四月には「その將ち來たる所の和蘭政事學の書」を譯すべきことを命ぜられた。「鷗外全集」第七卷、「西周傳」一六四頁。西は萬國公法を述べ、津田は國法學を受持つた。前者は慶應二年十二月に、後者は同年九月に翻譯が成り、各々幕府に上つた。津田はその「泰西學法論」序文に、「往年恭しく、大命を奉じ和蘭に遊び、西周助と借に法學を來丁<sup>レイデン</sup>の大學博士シモン・ヒッセリング先生に受け、先生の口授に従ひ、蘭語の儘筆記せしもの五種あり、其詳なるは西氏の譯する所、性法口譯の凡例に譲る、此書は即其第三種にして今余が謹で譯する所なり」とある(一一〇—一一一頁)。第一論性法學(naturrecht)の譯、自然法の思想である)は、津田の序文に見えるやうに、西が譯出する筈であつた。後者の「萬國公法」の凡例にはその上梓が約束されて居る(「明治文化全集」第九卷一八頁)。實際彼は慶應三年京都滞在の砌りこれを譯了して「性法説約」と題し草稿のまゝもつて居た。しかしそれはこの年の暮慶喜公に従つて急遽大阪に遷る際に失はれた。「鷗外全集」第七卷一七一頁、なほ一八二頁参照)。しかしこの部分は後にフィッセルینگ・ノートにより神田孝平が譯し、明治四年「性法略」として公刊した(「性法略」緒言。「明治文化全集」第八卷四頁。同解説五頁)。

津田は明治七年に「表記提綱」名政表學論を譯出した(一一七頁)。「表記」は統計學である。すなはち「和蘭政事學の書」の第五種である。本書は本邦で刊行された統計學原論の最初のものである。原本はこの場合も、和蘭將來のフィッセルリングの講義に據つたこと言ふまでもない。彼は跋文に「此ノ原本ハ今ヲ距ル事十年前余和蘭留學ノ日西周君ト共ニ鑿田ノ大學博士ヒッセリング先生ニ受ル所ニ係リ歸朝ノ後之ヲ譯セント欲シ塵事紛繁ニシテ果サズ昨夏偶暇餘ヲ得テ日光山ニ游ヒ湯元溫泉ニ浴シ大半卒業シ今夏更ニ訂正スト云フ」明治七年七月二十六日「津田眞道」と書いて居る(「表記提綱」明治七年四五頁)。この講義ノートは後に嗣子弘道氏から慶應義塾圖書館に寄贈され、そこで珍藏されて居る。「グラウンドベギンゼレン・デル・スタティステイク」Grundbeginsel der Statistikと題し、三章十三節から成り、主として片側に書かれた合判ノート六十六枚の内容を含んでゐる。杉享二の「形勢學論」はこのノートを借りて譯出したものと考へられて居る(「明治文化全集」第八卷法律篇「解説七頁」)。下出集吉氏は何に據られたのか知らないが、津田眞道先生は一度「表書提要」と題して譯されたといふことであるが、刊行に至らずして翻譯された原稿が紛失した、と言つて居られる(「明治文化全集」第九卷「經濟篇」解題二〇頁)。

かくて所謂その「將ち來る所の和蘭政事學の書」の四種が翻譯刊行され、第四論經濟學のみを缺くことゝなつた。「西周傳」には「六七年の交眞道政表を譯して世に公にし、題して綜紀學と曰ふ。周と行彦との學ぶところの政事學五科、こゝに至りて殆全くして、唯一の經濟學を闕く」とある(「鷗外全集」第七卷一八六頁)。こゝに「綜紀學」とは言ふまでもなく津田の「政表學」である。

## 三

第四論「經濟學」は鷗外によれば、津田眞道が譯する筈であつたといふ。「西周傳」には「この科は初眞道これを譯



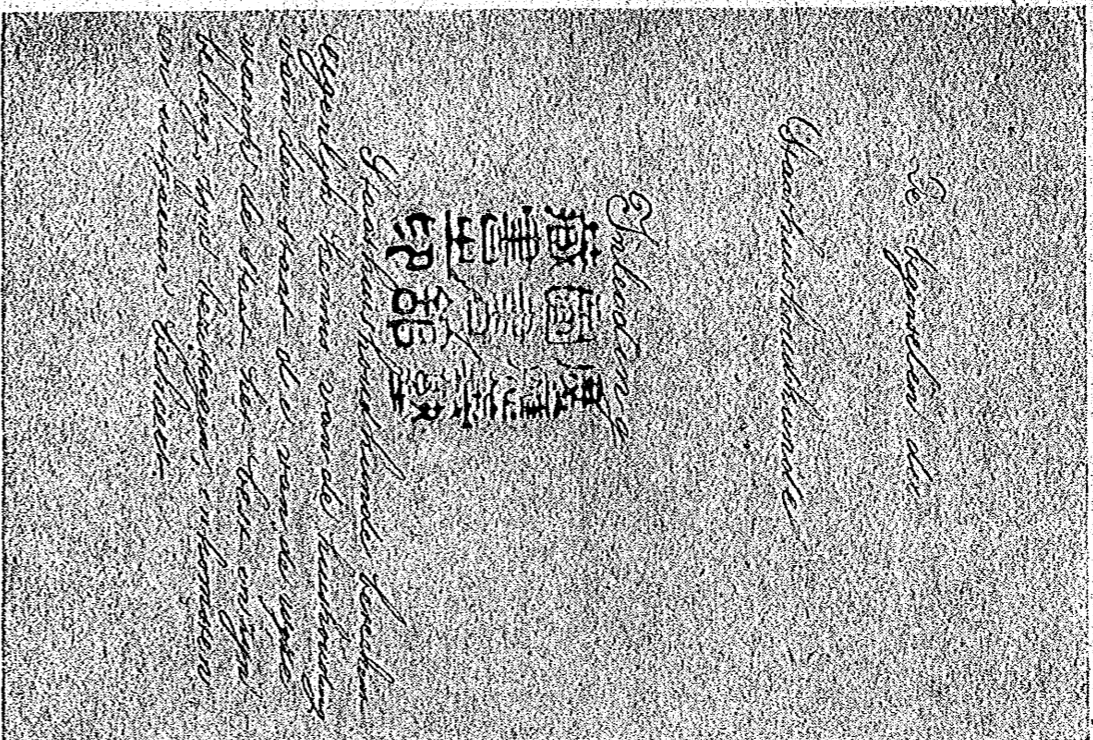
せんことを約して遂に成らざるなり」とある(「鷗外全集」第七卷一八六頁)。然るにこゝに「真道遺稿集」中に「西洋商人手引草序論」なる未定譯稿が收められて居る。吾々はこれを以つて彼等が「學ぶ所の政事學五科」翻譯の缺を補ふものと考へていゝのであらうか。

この譯稿は交換の起原から説き起し、商業を論じ、「商賣は人間の大事にて世界の大道具仕掛を運動せしむる者と謂ふべし、人間世界に交易を成さざる者、商賣に預らざる者、絶えてこれあることなし、驚く可き大船の積荷を取引する大商人よりして讀賣の小商人に至るまで、竹枝を番太郎にて買ふ貧しき老人より、母の筆買料に與へたる錢にて買食する悪小兒に至るまで、或は買ひ或は賣り賣買交易を爲さざる者ある事無し」と言つて居る(一七七頁)。また「商賣といふは買ふ事と賣る事を兼ねたる名なり、動もすれば唯賣る事とのみ心得たる人あれども誤なり」(一七八頁)と、商業の流通行程に於ける役割を明かにして居る。續いて工業が取扱はれて居る。「商賣と並べ論すべきものは工業なり、工業とは手職及び大仕掛にて品物を製作する事を指していへるなり、廣く言ば人の所業皆工業なり、故に耕作も工業なり、商賣も工業なり、總て天力と本手の力を假りて人力にて爲す所の事皆工業なり、借工業の大小は本手の多少に従ふなり、然るに其義狭く只工業といへるは天造物を人工にて製作して人用に供する所業ばかりを工業といふなり、此天造の儘にては更に値打無き物を人工にて値打を生ぜしめ、或は天造の儘にて値打寡き物に値打を加へて賣買品と成す人工を取別けて工業と云へるなり」(一七九頁)。すなはち生産論である。それはまた貿易を論じ、信用を扱つてゐる。貿易には「打太刀商賣請太刀商賣と云へる區別」あることを言つて居る。貿易の均衡をいふのである(一八〇頁)。本稿はなほ繼續される筈であつた。「買災難請合」(運送保險)、「手形仲買手形世話人」に就いて「次卷末に之を説くべし」また「是亦次卷に之を説くべきこととが約束されてゐる(一八二―一八三頁)。

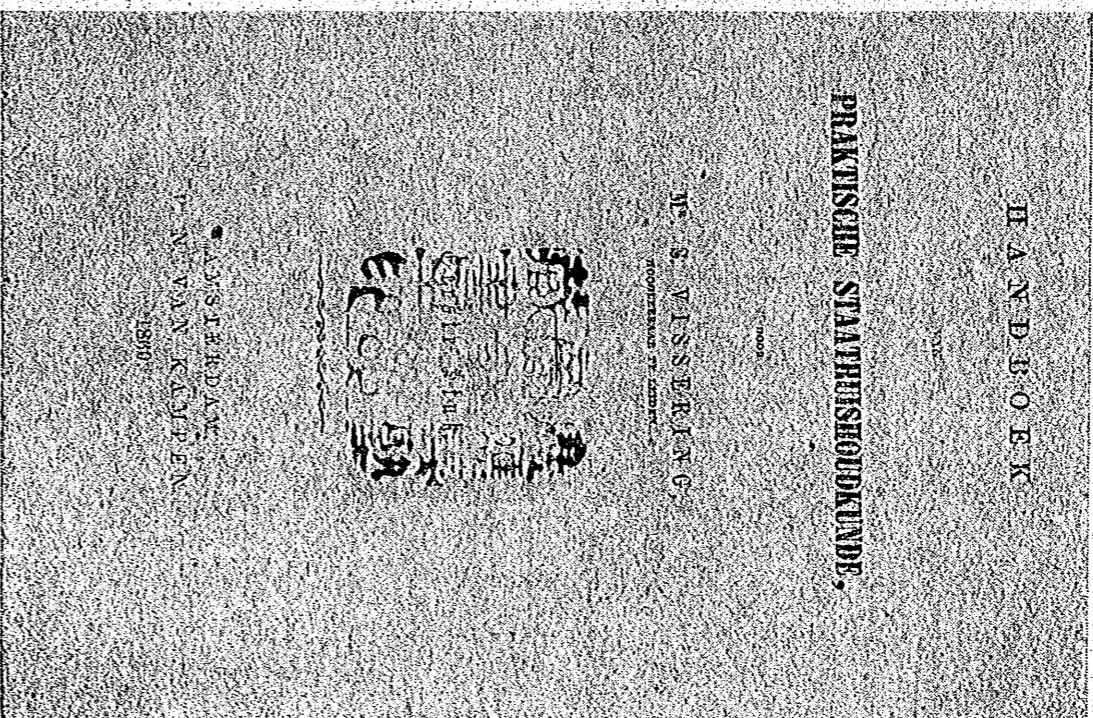
本稿の内容は頗る經濟原論を想はせるものがある。然らばこれを以つて彼等がフィッセルングから受けた「五科口訣」の一と推測していゝか、と言へばそうでない。これは彼等が和蘭帶在中にレイデンの一書肆から出版された「商人」De koopman と題する叢書の一冊「商業界」De handelswereld in hare veelzijdige rigtingen en vormen. の可なり詳しい抄譯である。それはどこまでも商業學の案内書、「商人手引草」である。

ではフィッセルング口訣の經濟學講義はどうなつたのだらうか。津田が「泰西國法論」の凡例に「西周助と借に來丁の大學博士シモン・ヒッセルング先生に受け、先生の口授に従ひ蘭語の儘筆記せし者五種あり」と書いて居るところは、前に引いた通りである。しかしこの記述は一部疑つていゝ。すなはち經濟學講義の筆記は作られなかつたのでないかと想像し得るのである。蓋し彼等が和蘭に渡つた時には、ヨッサが「稍々皮相の嫌ひはあるが、よく書いてある」(Luigi Cossa: An introduction to the study of political economy. Lond., 1893. p. 433.) と評する「實踐的國家經濟學提要」第一卷が既に公されて居り、歸朝の年一八六五年にその第二卷が出版された。これ等を講義のテキストに用ふるといふことが考へられるからである。而して前に述べた「統計學概要」のノートがこの疑問を確めて呉れる。このノートに「經濟學初歩」De beginselen der Staatshouckunde と題する八枚の筆記が收められて居る。それは「經濟學は本來國の經濟の學問、すなはち國がその所有財産、所得及び費用を、その利益のために最もよく處理する方法に就いての學問を意味する」“Staatshouckunde beteekent eigenlijken kennis van de huishouding van den staat d. i. van de wijze waarop de staat het best in zijn belang, zijn bezittingen, inkomsten en uitgaven beheert.”と云ふ言葉で初まる「緒言」と目次があるだけである。本文がない、そして目次の各章にその説明に相當する「提要」の「節」への参照が指定されて居る。この方法はノートを作ること不要ならしめる。





「田賦道」の著者、實踐的國家經濟學提要「原



「田賦道」の著者、實踐的國家經濟學提要「原

そしてまたこのことが經濟學の翻譯を遲延させたのに相違ない。何故なら簡約された原本がないのであるから、抄譯を試みやうとすれば、自らその抜萃を作らなければならぬからである。

この目次は津田、西兩留學生がフィッセリングに就いて教はつた經濟學の内容を示すものとして重要である。次ぎがその全文である。

「第一章 社會生活の基礎

「初歩」p.1-8 を見よ。

第二章 人類の欲望とその充足

「初歩」p.7-16 を見よ。

奢侈に就いて と對照せよ。

第三章 労働及び分業

「初歩」p.17-22 を見よ。

國民産業、その獎勵及びその分化に就いて p.78-86; 87-87, 72, 77, 78, 105-107; 127-132, 134, 137-137; 140, 141, 149; 152-156; 166-172. と對照せよ。

第四章 交換及び價值

「初歩」p.23-33 を見よ。

獨占と競争に就いて p.117-128. と對照せよ。

第五章 貨幣

津田道治編著「田賦道」



第六章 價格 「初歩」p. 34-42、續編p. 243-274を見よ。

第七章 労働賃銀 「初歩」p. 43-47を見よ。

第八章 初歩 「初歩」p. 50-58を見よ。  
p. 530-537と対照せよ。

第九章 信用及び利子 p. 67-77。  
銀行に就いてp. 275-306. と対照せよ。

第十章 人口とその生活資料論 「初歩」p. 336-346, 355, 356-363. を見よ。

第十一章 財産論 貧困に就いてp. 377-401, 407-427, 457-466. と対照せよ。

第十二章 國家と社會との關係 「初歩」p. 607-652. を見よ。

第十三章 國家の經費 「初歩」p. 707-721. を見よ。

これによつて彼等が和蘭に於いて受けた經濟學は、極めて内容の充實したものであつたことが想見される。

西周到「經濟學」と題する未發表の稿本があるといふことである(麻生義輝編「西周哲學著作集」解説三九〇頁)。津田の翻譯が出ないので、躬ら別にこれを試みたのかも知れない。或はまた「百學連環」の制産學(經濟學)の草稿を成すのかも知れない。それは近くその全集が刊行されるといふことであるから、その際には恐らく明かにせられるのであらう。兎に角「和蘭政事學の書」の第四種の翻譯はついに遂行せられなかつた。神田孝平の「經濟小學」を以つてこの缺を補ふものであるとする見解もあるやうであるが、これは年代的に見て當らない(「明治文化全集」第八巻法律篇解説六頁)。

彼は慶應三年九月「日本總制度」なるものを徳川幕府に建白した。これは當時なほ幕臣であつた彼が、「方今我日本國の形勢洋人之所謂合邦之姿に類似仕候得者、先以全國列國之差別無之候ては不相叶義」(一一九頁)との立場から幕府のために書いた一種の憲法草案であつて、直接經濟論には關係はないが、割愛するに惜しき特異な文献である。それは總政府を江戸に置く。立法は制法上下兩院と總政府が分掌する、但し重大事は勅許を受けなければならぬ。制法上院は萬石以上の國主が當る。下院は人口十萬人に付一人づゝ推舉した總代がこれに當る。列國(大名領)々内の政はその國主の全權に委す。列國の最も大なるものは關東領で、徳川家の世襲とする、といつたもので、

津田道治編著「津田真道」  
一三五 (三九七)



皇室を上に載ぎ、封建制度に片足をかけたままの、一種の近代的代議政體を考慮して居る。徳川幕府にいま少しく力が残つて居り、明治維新があのやうな大轉換を取らなかつたとすれば、意外にこのやうな鵷的形態を實現したのかも知れなかつた。

翌四年集議所の創立を建議した。後に公議所として現はれたものである(一二四頁)。この年の十月徳川家達に従つて静岡に移つた(一三三頁)。この月に開校した静岡學問所教授格としての赴任のためである(米山梅吉、「幕末西洋文化と沼津兵學校」、昭和十年、七八―七九頁)。この静岡學問所の後身静岡師範學校に傳はる。「開成所」及び「静岡學校」の蔵書印あるE. W. de Rooy、「歐洲經濟學史」E. W. de Rooy: Geschiedenis der staatswiskunde in Europa van de vroegste tijden tot heden. 2 deel. Amsterdam, 1851. (只今は静岡縣立葵文庫に移管されてゐる)に紅唐紙が貼つてあることから、この書が夙い時代に何人によつて通讀されたかに就いて疑問が投げられてゐる(「經濟論叢」第十八卷第一號、アダム・スミス生誕二百年記念號、武藤長藏、「スミスの名其生涯及び其學說を早く我國に傳へたる蘭文經濟書三三三六頁)。私はそれを沼津兵學校の頭取としてその地に赴いた西周よりも、その「學ぶ所の政事學五科」のうち經濟學の翻譯を擔當し、この地に來任した彼に疑ふのが眞實に庶すのでなかつたかと思ふ。

## 五

明治政府に入つてからは、二年に「年號を廢し二元を可建」と(紀元の制定)を建議し(一三七頁)。四年人心安定のため士族救済と國債の償還を説いた(一三九頁)。また明治七年森有禮が明六社を計畫し「明六雜誌」を出した時には、西村茂樹、西周、中村正直、加藤弘之、箕作秋坪、福澤先生、杉享二、箕作麟祥等とともにこれに参加し、初めて彼自身の經濟論を公にした。彼及び西周が和蘭で受けたものは、佛蘭西に入つてセイ、バスタアにより發展させら

れた英國正統派經濟學の思想である。従つて彼の思想もその流れを酌むものであつた。――

「夫レ方今世界ノ富ヲ語レバ人必ラス英國倫敦ヲ稱ス倫敦ノ外恰モ五大洲中他ニ富ナキガ如ク然リ英國ノ然ク富ム所以奈何曰ク英國運送ノ便吾地球萬國ニ冠タレバナリ英國運送ノ便固ヨリ天然ノ地利ニ存スト雖亦英國人民智巧ヲ競ヒ勉強ヲ争フノ致ス所ナリ夫レ英國船舶ノ多キ鐵路ノ蕃キ運送ノ便實ニ天下ニ甲タルハ世ノ知ル所ナリ是固ヨリ該國人民智識勉強ノ致ス所ナリ而シテ英國人民彼ガ如ク縱ニ其智力ヲ伸ル事ヲ得ル所以奈何曰ク英國政府其人民ヲ束縛セズ人民ニ與フルニ自由ノ權利ヲ以テスルニ職トシテ之由ナリ」(「明六雜誌」第九號、明治七年六月所載、「運送論」)

彼はまた同じ立場から自由貿易を主張し、その論據として貿易の均衡を説いた。わが國は明治初年以來産業の移植、技術の輸入、軍備擴充のため輸入超過を繼續し、連年正貨流出の形勢を馴致して居た。而してこの形勢を憂へて既に出版されたものに若山儀一の「保護稅説」及び同附録があり、明六社の同志中にも杉享二は「貿易改正論」を寄せて折衷的保護論を述べ(「明六雜誌」第二十四號)、神田孝平は「正金外出敷息録」を書いた。「我邦開港以來金銀ノ外出頗ル多シ近年最モ甚シ大抵其源六ナリ。其一輸出差、其二留學費、其三外人雇費、其四駐劄費、其五國債費、其六買物費ナリ。案ズルニ比年貿易輸入多クシテ輸出少シ、輸入品代價ノ内ヨリ輸出品代價ヲ引去レバ残りハ即チ外出ノ正金高ナリ、明治六年貿易表ニ據レハ此高八百〇三萬六千五百五十三圓二二六トアリ頗ル喫驚スベキ大數ナリ、六年前後ノ數ハ未ダ之ヲ知ル事ヲ得ズ、願フニ是……如此ニシテ己マサレハ其全ク盡クコト近キニ在ルベシ。特ニ從來有高ノ確知スベカラザルヲ以テ今年ニ盡ルカ明年ニ盡ルカ將タ數年ノ後ニ在ル歟早晚ノ期イマダ知ル可ラザルノミ。嗚呼前途ノコト如此、之ヲ浩歎ニ附セザル可ケンヤ。」(同第二十三號「正金外出敷息録」)。津田は初めわが

國の工業がなほ甚だ幼稚であつて保護政策によつて育成される程度に至つてゐないことを理由として、「保護税ヲ非」としたのであるが(同第五號)、後には貿易平衡論をその論據とした。

「余嚮ニ非保護税ヲ作りテ此事(輸入超過)ノ痛ク憂フルニ足ラザル事ヲ論ジタレドモ猶又茲ニ數言ヲ陳シテ却テ其喜ブベキノ景況タル事ヲ辨ゼント欲ス抑輸出ノ品額ノ此大差ヲ爲ス所以果シテ安シカ在ル一度其源因ヲ踪ネテ之ヲ知り得レバ余ガ所謂サマデ憂フルニ足ラザルノ景況ナル事明ラカナルベシ……」

然レバ則其源因果シテ安シカ在ルト謂フニ吾人ノ天性ニ原ケルナリ吾人固有ノ天性ニ新奇ヲ好ミ華美ヲ喜ブノ心アリ此心即是ナリ蓋シ此心是吾人ノ力作ヲ鼓舞シ人間ノ福祉ヲ増加スル所以ニシテ實ニ造花ノ大賚ナリ我邦人幸ニ此心ヲ存ス是我人民ノ亞非利加亞米利加等ノ野蠻ノ民ニ異ナル所以ナリ而シテ我邦人ノ内此心法度ヲ定メ政令ヲ掌ル所ノ諸大臣ニ尤多シトス是其鐵道電信燈臺造幣主船等諸般ノ新興作ヲ爲シ諸省府縣建築ノ業石橋大路瓦斯燈ノ設陸續トシテ作り文武官ニ禮服正服軍服ノ設アリ警吏兵卒ニ章服アリ我三千萬ノ人民一般ノ禮服亦洋装ニ倣ラヒ洋品ヲ用フル所以ナリ夫レ上之ヲ好メバ下必ラズ是ヨリ甚シキアリ……是輸出入ノ差年々八百萬圓ノ多キヲ爲ス所以ナリ

然レドモ今日出入ノ大差特ニ甚シク大ニ天然ノ權衡ヲ失シ洋品輸入ノ多キ人民ノ力ニ過ギタリ故ニ人民ノ之ヲ購求スル者其度ニ適セズ是目今洋貨ノ價大ニ減ジ或ハ原價ヨリ低キ所以ナリ想フニ今明治八年ノ如キハ輸出入品額必アズ其平均ヲ得ベシ或ハ輸出ノ數却テ輸入ノ額ニ踰テ稍前年ノ不足ヲ償ヒ以テ其權衡ヲ平均スベキノミ蓋輸出入ノ數到底平均ヲ得ザレバ貿易ノ專行ハルベカラズ猶風潮ノ理ノ如ク然リ一張一縮或ハ東ヨリ吹キ或ハ西ヨリ吹キ竟ニ風潮平均ヲ得ルニ在リ余故ニ曰ク輸出入ノ差ハサノミ深ク愛國者ノ頭腦ヲ惱マシムルニ足ラザ

ルナリ」(「明六雜誌」第二十六號)。

然るに明治八年には皮肉にもこの時代としては未曾有の大入超を示し、彼の豫想を裏切つたが、しかしこの頃のわが國の貿易はレッセ・フェールではなかつたので、政府の政策が反影することが多く、「風潮ノ理ノ如ク」一張一縮竟に平均を得る譯にいかなくなつたことは言ふまでもない。また神田孝平の議論に對しては、「外人雇費留學費買物費ノ如キハ苟モ我帝國開化前進ノ目的ヲ達セント欲セバ今日ニ在テ豈ニ洵ニ止ムベカラザルノ消費ニ非ズヤ蓋此消費ハ猶一家ニ在テ小兒教學ノ費用ノ如シ以テ他日生産ノ資本ニ供スル所以ナリ縱命目前ノ損失少ナカラズト曰フト雖後來ノ裨益ヲ計較セバ洵ニ止ムヲ得ザルノ消費ナラズヤ」と應へた(同第二十六號)。

六

本書の著者眞治氏は被傳記者の孫である。慶應義塾圖書館は大正二年著者の先考弘道氏から、前人の所謂「その將ち來る所の和蘭政事學の書」その他の寄贈を受けた。これは著者の談によれば、福澤先生と津田眞道男との間に約束があり、義塾創立五十年記念として現圖書館建築落成の際弘道氏がその約を果たされたものであるといふ。次ぎがその全部である。私はこれ等和蘭から將來された六十部七十冊の書籍を見る時、「西周傳」に「應慶元年十月十四日午後一時七分眞道と Leyden を發シ……十五日 Bruxelles に至ル。Leyden の書估 van Santen 眞道と交厚きをもて、送りてここに至る」(八五頁)。「鷗外全集」第一六二頁とある記述が了解できるやうに思ふ。彼等の留學は決して正則の學校課程を経たものでなく、變則的のものであつたけれども、西洋の政治學の講義をはじめて専門の學者より聽き學んだのであつて、これ等諸科學の理解の度は、當時に於ける獨學者流のそれと撰を異にして居たことを思はざるを得ない。



一、經國策

De koopman. Volledig studie-hulp-en handboek voor iedereen, die zich beweegt op het gebied van koop-handel, fabriekwezen of nijverheid. Tweede druck. Leyden, D. Noothoven van Goor. N. D.

1. Handelswereid in hare veelzijdige rigtingen en vormen, benevens de regts-geldige leer van wissels, asofgnatien, enz. Leyden.
  2. De koopmans-standaard, or volledig alphabetisch zakboek der munt-, maaten gewigtkunde en geld-en wisselcoersen van den sanschen aardbol, enz. Leyden.
  3. De koopmans-mentor op het kantoor en op de beurs, of het koopmans-rekenen, de koopmans-correspon-dente, de leer der effecten en actien, handelsantien, enz. Leyden.
  4. De Boekhouder, of theoretisch en praktisch leerboek over het dubbel of italiaansch boekhouden enz. De koopmans-goudmijn. Leerboek der warenkennis, voor ieder koopman... Leiden, N. D. (E14-93-1)
- Kops, J. L. de Bruyn: Beginselen van staathuishoudkunde: nieuw nitgave. Amsterdam. (E14-169-1)
- Verloren, P.: De ver. ouding van den staat to het Bankwezen. Utrecht, 1864. (E17-50-1)
- Vissering, S.: De beginselen der staathuishoudkunde. (Manuscript. R 4-7-1)
- : Handboek van praktische staathuishoudkunde. Amsterdam, 1860-65. (E14-168-2)
- 一、經國策
- Almanach de Gotha. Annuaire diplomatique et statistique pour l'année, 1865. (R4-6-)

Vissering, S.: Grondbeginselen der statistick. (R4-7-)

二、經國策

- Groenwvegen Simon van: Inleydinge tot de hollandsche regts-geleertheyt, beschrevenby Hugo de Groat.... Delf. 1657. (J10-35-1)
- Grotius, Hugues, Le droit de la guerre et de la paix, par Nouvelle traduction, par Jean Barbeyrac.... Laide, 1759. (J8-33-2)
- Leeuwen, Simon Van: Het Room-Hallands-regt, waar in de Roomse wetten, met het huidige dagse Neerlands regt, in alles dat tot de dagelijkse, so wel in de vaste regts-stoffen, als in de manier van regts-vordering overeen gebracht werden... Amsterdam, 1676. (J10-36-1)
- London the Commissioner of police of: Regulations for the police of the city of London... London, 1843. (J12-56-1)
- Martens, G.-F. de: Précis du droit des gens moderne de l'Europe. Tome Premier. Paris, 1864 (J2-107-1)
- Montesquieu: De l'esprit des lois. Précédé de l'anglaise de cet ouvrage par d'Alembert. Tome 2. et 3. Paris, 1784 (J 10-33-2)
- Noest, Gerard: Het Algemeen staatsrecht, gebruikelijk in tyden van vrede en in den oorlog... Amsterdam, 1753 (J8-29-1)
- Pinto, A de: Handleiding tot de wet op de regterlijke organisatie en het beleid der justitie. Gravenhage, 1811 (E O 11)

1844. (J10-80-1)

Pufendorf, Le baron de: Le droit de la nature & des gens ou système general des principes les plus importants de la morale, de la jurisprudence, & de la politique. Traduit du latin par Jean Barberrac. Leyde, 1759. (J8-32-2)

Rossi, P.: Ouvres complètes de. Publiées par ordre du gouvernement italien. Traité de droit penal. 3. éd... Paris, 1863. (J10-39-2)

Staatsbladen van het koninkrijk der Nederlanden over de jaren 1813-1840 met een algemeen register. Zalt-Bommel, 1841. (J8-30-1)

Vissering, S.: Het wisselrecht der XIXde eeuw. Naar aanleiding van de allgeine deutsche Wechsel-Ordnung, onderzocht en vergeleken. Amsterdam, 1850. (J10-34-1)

Wheaton, Henry: Elements du droit international. 3. éd. Leipzig, 1858. (J10-38-1)

———: Histoire des progrès du droit des gens en Europe et en Amérique depuis la paix de Westphalie jusqu' à nos jours... 3. éd. Leipzig, 1853. (J10-37-1)

Walf, Christian L. B. de: Institutions du droit de la nature et des gens... Traduit du latin... Leyde, 1772. (J8-31-1)

## 四、海峽總論

Halberstadt, A.: Koloniatie van Europeanen te Suriname. (7x-E11-1)

Martens, Bn Charles de: Le guide diplomatique. Précis des droits et des fonctions... 4. éd. Paris et Leipzig, 1854. (P7-58-1)

## 五、聖書總論

Bijbel, dat is de gansche heilige schrift, vervattende al de kanonijke boeken des ouden en nieuwen testament. 1863. (F5-119-1)

Comte, Auguste: Algemene grondslagen der stellige wijsbegeerte. Gravenhage, 1846. (F1-91-1)

Joffroy, Th.: Cours de droit naturel professé a la faculté des lettres de Paris. 3. éd. Paris, 1858 (F2-177-2)

Opzoomer, C. W.: Het wezen der deugd. Voorlezingen, in den winter van 1847-1848 te Utrecht ingesproken. Leyden en Amsterdam, 1848. (F5-118-1)

Parvé, D. C. Steyn: De Bijbel, de Koran en de Vedas. Tafereel van Britsch-Indie en van den opstand des inlandschen legers aldaar, Haarlem. 1858-59. (F1-92-2)

Pouillon, P.-J.: Philosophie du progrès—Programme. Bruxelles, 1855. (F1-90-1)

## 六、歷史總論

Heusden, A. A. van: Handleiding tot de kennis nieuwe geschiedenis voor de kadetten van alle wapenen. 3. deel. 2. druk. Breda, 1863. (H6-37-1)

Historisch-geographisch atlas der algemene en vaderlandsche geschiedenis. 2. druk. Gravenhage, 1864.



(5x-65-1)

Michelet, M.: Précis de l'histoire moderne. Paris, 1850. (H7-49-1)

Sédillot, L. A.: Histoire des Arabes. Paris, 1854. (H6-38-1)

Wester, Th. B.: Auszug aus dem Lehrbuche der Weltgeschichte für Schulen. neu. Aufl. Münster, 1884. (H6-36-1)

本書は發行年號から和蘭の關係の發達を述べたものであり、

中、地理書

Hughes, Williams: The treasury of geography, physical, historical, descriptive, and political; containing a succinct account of every country in the world... n. ed. Lond., 1874. (G2-66-1)

School atlas van alle deelen der aarde. (G3-28-1)

Terwen, J. L.: Het koninkrijk der Nederlanden, voorgesteld in eene reeks van naar de natuur geteekende schilderachtige gezigten. Gouda. (G3-14-1)

本書は「Den Weledelgestreng Heer Tsuda Suitsu uit hooy achtung tot aan denken bij zijn vertrek naar Japan, van Leiden, 30. October 1865 Zijn Vriend P. van Santen.」の書入である。本書は「八ノチノ」の書籍「マン・サン」が津田眞道の和蘭出發の際に贈つた書物である。但し「一八六五年十月三十日」の附録「マン」は彼等の和蘭出發の日に関し問題を提供して居るものであるが、

八、科學書

Batsch, Carl: Hydrotechnische Wanderungen in Baiern, Baden, Frankreich und Holland gemacht in dem Jahr 1821. Weimar, 1824. (Marginalien zur neu umgearbeiteten und vermehrten Ausgabe der theoretisch-practischen Wasserbaukunst. S6-30-1)

Fresenius, C.: Remigius (bearb.): Anleitung zur quantitativen chemischen Analyse... 5. Aufl. Braunschweig, 1892. (S6-27-1)

Gorup-Besanez, F. F. v. (bearb.): Lehrbuch der Anorganischen Chemie für den Unterricht auf Universitäten, Technischen Lehranstalten und für das Selbst-Studium. 2. Aufl. Braunschweig, 1863. (Lehrbuch der Chemie. 1. Bd. S6-32-)

——: Lehrbuch der organischen Chemie... 2. Aufl. Braunschweig, 1864. (Lehrbuch der Chemie. 2. Bd. S6-32-)

Hoever, J. van der: Leerboek der dierkunde ten dienste van het middelbaar on derwijs. 2 druk. Leiden, 1864. (Handleiding tot de natuurlijke geschiedenis van het Dierrijk. S. 6-31-1)

Müller, Joh.: Lehrbuch der kosmischen physik. 2. Ausg. Braunschweig, 1865. (Müller-Ponillet's Lehrbuch der Physik und Meteorologie. 3. Bd. (S6-33-2)

——: Lehrbuch der physik und Meteorologie. 6. Aufl. Braunschweig, 1862-63. (S6-26-2)  
Ordonnance sur l'exercice et les évolutions de la cavalerie, du 6 décembre 1829, et instruction pour les exercices a pied et a cheval des dragons armés de fusil, du 1er septembre 1851. Première partie...

Paris 1864. (S4-161-1)

Parville, Henri de: Causeries scientifiques decouvertes et inventions progrès de la science te de l'industrie, Paris 1864. (S2-187-1)

九、叢書

Bomhoff, D.: Nieuw groot woordenboek der nederlandse taal. Leyden, 1858. (D4-10-1)

Bruin, Servas: Historisch en geografisch woordenboek. Leiden, 1869. (D12-23-2)

“Aan de heeren Tsuda Mamtzi, Nishi Amane aangeboden door Y. J. Hoffmann Leiden (Holland) Januari 1875.” 書入りなぬ。カトヤンカ△△書目本ナリ。

Gérusez, J. B. L.: Nouveau dictionnaire de poche, français-hollandais... n. éd. Utrecht. (D5-78-1)

Kan, J. B. en Schröder, H. P.: Latijnsch-nederlandsch woordenboek. Utrecht, 1864 (D5-76-1)

Kramers, J.: Algemene kunstwoordentalk... Gouda, 1863. (D12-24-1)

———: Geographisch woordenboek der gheele aarde Gouda, 1855. (D12-25-1)

Neues, vollständiges deutsch-holländisches und holländisch-deutsches Wörterbuch. Amsterdam, 1851, (D5-77-2)

A new pocket-dictionary of the English and Dutch languages. Steriotype-edition, Leipsic. (D5-44-1)

一〇、叢書

Bisbare, J. etc.: Le baccalauréat ès sciences résumé des connaissances exigés par le programme officiel. Paris, 1864. (M2-70-3)

E・B・デイトリッヒ著「アメリカの極東貿易」

山 本 登

極東は目下世界的競争の一焦點たる感がある。日支事變の勃發以來、日本の建設的態度の表明にも拘らず、イギリスをはじめ米、佛、ソの對支援助は、活潑に續けられた。それは前世紀中葉以降、支那は言ふまでもなく、極東諸國の殆んどすべてが、これら歐米諸列強の對外的活動の絶好の對象であつたといふ歴史的事實の、當然の結果に外ならなかつた。その間日本のみよく獨り、獨立國たる地位を保持し得た事は、われ／＼の深く誇りとする所でないければならない。

一昨年九月の歐洲戰亂の開始は、この事情に一轉機を與へた。ドイツの壓倒的勝利と佛・蘭・白諸國の潰滅、獨ソ提携の成立と日・獨・伊樞軸の強化は、極東における英・佛・蘭諸勢力の全面的後退を實現した。これに代つて目覺しい進出態勢を示し來つたのがアメリカである。

その地域的隔離性、經濟的實力を背景とするアメリカの攻勢は、頗る注目すべきものがある。口には西半球モンロー主義を唱へ乍らも、とくにその海軍の兩洋作戰を根據として、西に對英援助を増強しつつ、東には極東工作に餘念がない。數次に亘る對英援助借款の設定、對日經濟的壓迫手段の採用、南方領域に對する劃策等、その活動は